# みんなでトークオーバー・人権こども塾文化祭2023

日時：2023年11月5日（日）12：30受付開始13:00～16：00

場所：徳島県立二十一世紀館イベントホール（文化の森内）

## 第3部 会場みんなでトークオーバー

**≪進行：有井温人≫**

今から，第３部である，「会場みんなでトークオーバー」を開始します。第３部では，皆さんも発言していただいて，普段の「人権こども塾」の雰囲気を感じていただけたらと思います。内容は何でも構いません。今回の感想でも，これまで学んだことでも何でも構いません。それでは始めていきましょう。発言したい方は挙手をお願いします。

**≪ちーさん≫**

（挙手する人がいないのを見て，まっすぐ手を挙げ，発言を始める）私は不登校だった頃があるという話をさっきさせていただいたんですけど，その頃に，じゃあ何をしていたかというと，インターネット上でゲームのスキルを使って，そこの運営をしていたんです。

ゲームのスキルの運営をする中で，いろんな人とインターネット上で出会ったんですけど。（当時に思いを馳せながら，一言一言を丁寧にゆっくりと）その中に１人，福島に住んでいる人がいて，その人はボクの１歳上なんです。東日本大震災の時の話を覚えているっていう話を，ちらっと１回言ったことがあるんです。当時，彼は３歳とか，記憶もあまりないとは言っていたんです。でも，１つ覚えているのが，震災で避難した時に，おばあさんが椅子が倒れてきたから頭から血を流していて，「ほんま人って死ぬんだな」って言っていたのがすごく印象に残って。

去年，その人に，「そういえば福島の話をしよったけど，他に体験とかあった？」と聞いたら，その人は原発事故で住む場所がなくなったって言っていて。ボク，まさか目の前に当事者がいると思っていなくて。デリカシーがないと思ったかなと思ったんですけど，そんな当事者を目の前にして，何て言うんでしょう。何も言えなくなったということです。「そうなんだ」みたいな。「そういえば，そんなことを言いよったなぁ」みたいなことを思い出して。そんなことを考えたら，「今，どうなの」っていう話になって，（身振り手振りを加えながら）彼は，「今は福島の真ん中の方にいるから，まあ，いけてるけど」みたいな。「ほとんど覚えてないわ」みたいな話で。

ボクもさっき話した通り，「ひとごとじゃないな」っていうのはやっぱりあって。それこそインターネットの普及してきた現在，いろんな人の話が聞けて，いろんな人と出会える時代で，そんな場所です。そんな人と話す時に，何も言えない状況になってしまうわけです。「ひとごと」にしておくと。結局，そんな人と出会って，いざその人の話を聞いて，原発の被害に遭った人の話を聞いたりしても，「ひとごと」にしない。そうでないと，その人の思いを取りこぼしてしまうんです。その人が言いたかったこととか，感じていたこととか。ボクは当時，正直あまりわからなかったです。「あぁ，そうなんや」とは思っていませんでしたが，（一言一言に思いを込めて力強く）結局，「ひとごと」にしないこと。「わがこと」にすることによって，解釈することが最近できてきたんです。

自分の人生において，何かを受け取る時は，すべて「わがこと」で生きよう。それがボクのモットーというか，とりあえず言いたいのは，何かを受け取る時は，「絶対わがことで」というのは考えています。その話が，今日話を聞いていて出てきてうれしかったというか，そうするべきだったんだなあとい

うのを思いました。(拍手)

**≪進行:森口健司≫**

(壇上の中学生の向かって誘いかけるように)中学生のみんなね，フロアーに行ったらたぶんマイクは返ってきません。ちょっと喋りましょう。どうでしょうか。

これだけ中学生が自分の言葉で語るということを，教師になった当時は想像もしなかった。でも，今日初めて聞いてくれたお父さんたち，お母さんたち。やっぱり沁みるんです。やっぱり切ない体験もするし，苦しいこともあるし。でも，そのことを語った瞬間，力が湧いてくるんです。

今日，黒尾さんと木村さん，こういう２人との出会いがあって，また世界が広がります。その思いをちょっとみんなにしゃべってもらって，フロアーにという形にしたいと思います。どうでしょうか。いける？はい，じゃあお願いします。(マイクを渡す)

**≪ゆづき≫**

ボクは原発事故についてなんですけど，そういうのを新聞とか映画があって，そういうのを観ていたんですけど。(一生懸命言葉を探しながら語り始める)ボクは勝手に知っている気になっていたなと思ったんです。この話を聞いて。実際この話を聞いていて知らないこととかが多かって，そういう知っている気になっていた自分が恥ずかしくなりました。

(言葉に詰まり，何を語ろうかとしばらく思いを巡らせながら)ボクが「わがこと」に捉えるためにどうしたらいいかって考えてみたんですけど，自分が思うのは，直接その現地に行って，その被災した人とかの話を聞いたり，実際に行って現地を見たりするのが一番だなと思っていて。映像とかで見ても，わからないところがいっぱいあると思うし，現地に行かないと，直接語り部さんとかに聞かないと，わからないところはあると思いました。

実際，その福島の原発事故とかハンセン病を取り上げているニュースとかは，ボクの中では少ないと思うんです。被災してから何年か経ったという時だけ取り上げているくらいなので，ボクと同じで，全く知らないという人が多いと思うんです。だから，こうやって話をしてくれる場があるっていうことは，本当に大切だなと思いました。ありがとうございました。(拍手)

**≪進行:森口健司≫**

はい，じゃあ次いきましょう。(手が挙がったのを見て)はい，いこう。

**≪N村≫**

すごい私事になるんですけど，(体験の一つ一つを，少しずつ引き寄せるように言葉を探しながら)私，４つ上のいとこがいて，すごい小っちゃい頃から仲良くしてくれて，すごく大好きなんです。そのいとこのことが…。そのいとこのお母さん，私からしたら叔母にあたる人が，結構お酒が好きだったり，いとこに対して言葉の暴力だったりとか，そういうことをする人なんです。で，私がそれを知ったのが，たぶん小６の頃か中１の頃辺りで。その頃って，たぶんコロナ期間だったんです。コロナだから，いとこと住んでいるところが離れていたので，いとことも会えなかったし，コロナ前だったら，いとこに会ったらすぐに飛びついて，「Ｙちゃん，Ｙちゃん，だっこして」とか「これして遊ぼ」とか，すごい言っていたんですけど，コロナ期間の時に，ちょうど思春期とかあって。その時にＹちゃんの家庭環境で，コロナ期間開けてＹちゃんに会った時に，私，どう接していいかわからなくなって。いつもなら「Ｙちゃん，Ｙちゃん」って行く所を，行かずに「ヤッホ

ー！」みたいな。それだけで会話が終わったんです。

私はそれをずっと後悔していて。その「Ｙちゃん，ヤッホー！」って言っていた時は，人権とかあまりやっていなかったし，急に虐待とか，そういうのが一気に身近に来て。小６か中１の頃の私は，なんか，どこか「他人事」というか，物語の本とか読んでいるような感じになりました。あんまり受け止めきれなくて，「Ｙちゃん，ヤッホー！」とか言って，その後，会った時に，いつも通りのＹちゃんで，「最近どお？元気にしとった？」みたいな感じになっていて，「あぁ，全然普通やな」って思って，中１の頃を過ごしました。

けどやっぱり家庭環境で，Ｙちゃん結構「鬱」になっていて。その頃の私は，お母さんから聞いた時も，「あぁ，そうなんや」みたいな。どこか「他人事」で。あんなに大好きだったのに，何でこんなに「他人事」として受け取っとるんだろうなって気持ちがずっとあるんです。

それでもやっぱり，Ｙちゃんが来たら，Ｙちゃんはいつも通りに，「元気やった？」とか「写真撮ろう」と言うけど，私のそのＹちゃんに対して，「うん，うん」ってちょっと冷めた態度だったり。（精いっぱいの思いを込めて）ある日，お母さんからの電話で聞こえたのは，「飛び降り」みたいなことが聞こえてきて，「鬱病」とかで入院していて，リストカットもしちゃうし，通っていた学校も止めて通信制の学校に行ったり，寮にいたのを違う寮に行ったり。

それで２階から飛び降りたって聞いて，骨は折れるし，（一生懸命，手で杖の表現をしながら）松葉づえとかやって。でも，その時も普通で，飛び降りたって聞いた時も，私からしたら，「あぁ，そうなんや」って。お母さんたちの話を聞いていたら，その飛び降りた理由が，私からしたら叔母さん，Ｙちゃんのお母さんに見て欲しいみたいな理由で…。そこでやっぱり，（力を込めて）子どもは親を選べんけど，Ｙちゃんからしたら，自分を痛めつけてでも見て欲しい存在なんだなと思ったんです。

私も結構家族が大好きだし，お母さんに見て欲しいっていう気持ちもわかるけど，Ｙちゃんに対して，ストレスのはけ口みたいに暴言を吐いたり，そんな人のために，Ｙちゃんが自分を犠牲にする必要はないんじゃないかなって思って。コロナ明けに，Ｙちゃんに対して結構冷めた態度をとっていた私は，今さら，そういうことを言うのは違うんじゃないかなと思ったり。４つ下の，あまり関わりも体験もないいとこから，「そういうのやめてよ」とか言われても，Ｙちゃん自身も困るんじゃないかなと思ったり。だからそれを私はあまり言えなくて…。

今，こうして言っている時でも，テレビ中継されて，これをＹちゃんが見たらどうなるだろうとか，お母さん見たらどう思うだろうとか思ったり。人権学習をある程度して来て，そんな私が，そのＹちゃんの家庭環境に対して言うのも，なんかちょっと違うんじゃないかなとか思ったり。

私は，コロナ期間が明けた時に，あいちゃんの家庭環境を知って，見てたわけだから，今さらどうしたらいいのかなと思ったり。Ｙちゃんが私の家に来ました。そんな時でも，「ヤッホー」とか，そんな軽いあいさつしかできなくて。来た時も，私はその，顔見とって気づいていないふりをしたり。その時にちらっと見るＹちゃんの顔が，なんか，すごい寂しそうな顔で。それもまた，私からしたら「わあ」ってなっちゃって，関わり方をわからなくなったり。

私の身近な人として，おじいちゃんが死んだんですけど，おじいちゃんが死んだ時，それもコロナ期

間が明けた時だったので，立ち入り禁止が取れなくて，おじいちゃんの子ども，私のパパだったり，そういう人しかおじいちゃんの最期を見れなくて，私はおじいちゃんがいる病院の駐車場の車の中で泣いているんですけど，その時に私が思ったのが，「あぁ，私泣けるんや」と思ったんです。

コロナ明けて，おじいちゃんとの関わりもなくて。コロナ明ける前だって，おじいちゃんは病院に行ったりしていたから，「あぁ，私，泣けるんや」って思って。だけど，Ｙちゃんとか，飛び降りました。私はそれを，「そうなんや」って思っちゃって。そんな私が，今さらいとこのことを心配するのは違うんじゃないかなと思って。

人権集会の時に，私の１歳上の先輩が，虐待されていますっていう話をしていたんです。その時に，何で虐待するかっていう話を聞いたり。それを私は，Ｙちゃんと照らし合わせながら聞いていたんです。だから私は家族からもすごく大切にされるし，お母さんも私を心配したりして，高校のために，パートとか仕事とか新しいところに変えたりして，一生懸命頑張って。そんな世間一般に言って「幸せな家庭」みたいなところにいる私が，そのＹちゃんの家庭環境に対して，しかも逃げた私が言うのは，やっぱりＹちゃんからしたら腹が立たんのかなって，ずっと考えていて。

これも親にも言えないし，もちろんＹちゃんに対しても言えないし。お母さんは，その叔母さんに対して完全に縁を切っている状態で，その叔母さんに対して文句を言いに行くことはできないし。だから，私がこうして長々語って何が知りたいかなっていうのは，いとこに対する関わり方が知りたいです。ありがとうございました。（拍手）

**≪進行：森口健司≫**

もう１人，（進行のアッチャンの意思表示を見ながら）いいですか。じゃあ，お願いします。

**≪アッチャン≫**

アッチャンです。ボクは，さっきの話してくれたことに出てきた，「わがこと」として考えるということについて考えてみたんですけど，「わがこと」にして考えるっていうのは，その表面的なことだけじゃなくて，ちゃんとその意味とか，どうしてそうなったのかということをちゃんと知ってから考えるっていうことと，今思いました。

（懸命に言葉を探しながらしっかりと）例えば，ボクは，原子力発電っていうものに関しては，結構肯定派なんですよ。なぜかって言ったら，少ないコストでいっぱい電気が作れるし，どうしてそういう原子力関係が使われているかということを知った上でこういうことを言っているんですけど，やっぱり福島の事故とかで，原子力を使ったら，人が死んじゃったり，自然が破壊されたりするっていうイメージを持っているじゃないですか。だから，やっぱり原子力は悪いっていう考えを持つ人もいるじゃないですか。でも，その原子力が良いっていうのはボク個人の考えなので，いろんな考え方があっても良いと思うんですけど，やっぱり，自分と照らし合わせて考えようとした時に，（言葉が見つからなくてしばらく考えながら）何が言いたいんだろう。…考えている物事を例えば，100知れるとしたら，まだ10しか知らないのに，これはこうだと言ったり，肯定したり否定したりというのは，ちょっとボクは違うんじゃないかと思って。100ある内の80知っている人は，そのことに対して意見したりするのは，理にかなっているというか，そういうふうに思いました。

そういうことを思っていたんですけど，（言葉が上手く見つからず，照れくさそうに）全部が全部，自分に照らし合わせて考えるっていうのは，無理なわけじゃないですか。あなたのことを自分と照らし合わせたらこうだし，そう考えていたらきりがないわけで。だから，これからは，自分にできる最大限のことをしていこうと思いました。ありがとうございました。（拍手）

**≪進行：森口健司≫**

（塾生の言葉を受け止めながら，じっくりと）1990年に全体学習というのが始まった。それは，部落問

題を本気で語り合うというところで始まったんですが，自分のことをみんなで語っていくという語り合いになった時に，これは，集団カウンセリングだというふうに思うようになったんです。自分をさらけ出していく。友達の言葉に癒されていくんですね。自分の語りに自分が癒されていくんですね。（何度も壇上の塾生を振り返りながら）「人権こども塾」の月に１回，２回の時もありますが，それが生きがいであり，喜びであり，なんか元気になっていく。「早く学校に行って，こんな話をしたい」そんな気持ちにしてくれる。

なかなか答えは出ないかもしれません。でも，その都度学びながら人とつながっていく。いろんな世界を知る。交流することによって，つながることによって。わざわざ福島へ行くことは，なかなかできません。いつもいつも長島愛生園に行けません。大島青松園に行けません。でも，こういう学びがあって，いろんな世界を知ることによって，やっぱり豊かになっていきます。（会場に対して，笑顔で身振り手振りを交えながら）こうしてたくさんの人が思いをもって，ここに来てくれています。その人たちに最後，限られた時間ですので，長くしゃべられたら非常に辛いのですが，意見をいただけたら。どうでしょうか。はい，どうぞ。

**≪香川県三豊市人権あゆみ会　蔦田耕作≫**

（ゆっくりと一言一言に思いを込めて）私は，香川県の１番西の端の三豊市というところから来ました。そっちの方で大人の会，「人権あゆみ会」というのを，だいたい月２回やっています。会員が30人くらいいるんですけど，今日いろいろと聞かせていただいて，いろんなことを考えさせられました。

後半部分のハンセン病と原発に真正面から向き合い活動されている，プロとしてのお２人のお話は，本当に初めて聞くような内容も多くて，厳しいものを突き付けられたなあと，そういうことを改めて思いました。

木村さんが，子どもらを見ていて，なぜ自分らが人権こども塾に居るのかという思いは語ったけれど，やっぱり，原発やハンセン病につながる部分も含めて，こだわった生き方をしなくてはいけないとか，そういうふうに指摘されましたが，それはとりもなおさず，私に対しても同じようなことを言われたというふうに受け止めました。

今すぐに，それに対して答えは出てくるものではありません。ただ今後，その言葉を生かし続けて，私たちの「あゆみ会」の中でも話していきたいと，そういうふうに思っています。

でも最初に子どもの皆さん方が語られた「何故，人権こども塾に自分がいるのか」ということを，そのことを自分の言葉で，（笑顔で）この場にいる理由を語ってくれたと思います。その共通しているところは，（自分の書いたメモを見ながら）「聞いてくれる」「返してくれる」「受け入れてくれる」ことの心地よさということを，10人の人がそれぞれ10人の言葉で語ったと思います。

私たちの「あゆみ会」もそういうような語る場にしていきたいということを強く思います。今日，本当にいろいろな刺激をいただいて，（いっぱいの笑顔で）森口先生の目が光っているので，（進行役の森口さんから，笑顔で「終わりましょう」声がかかる）終わります。ありがとうございました。（拍手）

**≪香川県高瀬中学校教員 宮内宏和≫**

ゆづきさんの「勝手に知っている気になっていた」という言葉がグサッときました。私も何回か来たりしながら，勝手に知っている気になっていた。ハンセン病の問題もそうだし，部落問題もそうだし，も

っと本気でやらないかんなということを，はらわたからえぐり出してくれたような。勝手に知った気になっていた。もういいかではなくて，もっと大切にしたいことが今たくさん出てきました。これを話したら長くなるので，またメッセージにして送ります。本当にありがとうございました。（拍手）

**≪進行・森口健司≫**

もしできたら，保護者の方で手を挙げてくれたら嬉しいです。はい，どうぞ。

**≪島藤託也≫**

20年以上，川内町で鳴門金時を栽培しています。人権について考えることが好きで参加させてもらいよるんですが，「何で参加するのかな」と思って皆さんのお話を聞かせてもらっていたんですが，「私は私でよかったな」って思いたい部分があって参加させてもらっているのかなって，思ったんです。

イルカの話とか動物の話も聞かせてもらって，こういうことを職業になされて仕事をしよる人もおられますし，いったい何が幸せなんだろうかな，何が正しいんだろうかなと思って，ハンセン病のお話，原発のお話も交えて聞かせてもらったんですけど，「私は私でよかったな」って思うには，もっとどうしていくべきかな。

（いっぱいの笑顔で，元気よく生き生きと）42年を振り返りさせてもらって，それなりに自分に自信はあったんです。自分のことを好きになって，自分の可能性，いろんな価値観，考えがあるけど，自分は自分の，あわよくば周りの人も幸せにできるような生き方がやっていけたら，それが自分にとっても，すごい向上心を持って生きていけることにつながるしと言って，自分で自分を高めていたつもりだったんだけど，いざここ最近コロナ禍でいろんなことがあったんです。

私自身，中２と小６の娘がいるんですが，本当に家族の幸せを願って，自分の農業という仕事も一生懸命，時間に追われ，仕事に追われ，休日も今日も仕事をしてきたんですが，それなりにみんな一生懸命，自分のステージで，自分の家族も一生懸命生活をしているんですけど。（思いがあふれ，込み上げる涙をこらえながら）中２の娘がちょっと学校に行きにくくなったんです。

父親としては，娘が幸せそうにしていないのが，ボクの力不足だなっていう部分もあるし，悔しいな，幸せにしてやりたいなって思います。でも，そうやって思うからこそ，やっぱり，それぞれ１人１人の自分自身がどうあるべきかとか，やっぱり家族と思うんですよ。自分の周りの人たちの幸せ，（精いっぱい言葉をつなぎながら）それを追求していくことが，「国が，行政がしていることだから，仕方ないかな。あきらめないかんのかな」そういうモヤモヤが大人になってもあるんだけど，そういう自分の幸せ，家族の幸せ，周りの幸せを突き詰めていくことが，日本の国を豊かにしたり，同じ過ちを繰り返さない社会活動にもつながっていくのかなと思って，今日お話を聞かせていただきました。

短くせないかんのですが，今日初めて二女と一緒にこの会に参加させてもらいました。ありがとうございました。（拍手）

**≪進行：森口健司≫**

本当に染み込んでいきます。本当にすごいです。これが人権学習ですよ。いこうか。はい。（挙手した会場の男性をまっすぐ手を伸ばし示しながら）よろしくお願いします。

**≪和泉眞藏≫**

（ゆっくりと，そして丁寧に）和泉と言います。日本で数少ないハンセン病の専門医です。ずいぶんハンセン病に関わってきました。30歳の時から専属して，今86歳ですから，56年間ハンセン病の人権を含めてやっています。

今日は，たくさん言えないので，１つだけ，黒尾さんに話された中に，重要な点が落ちているので，その点だけ，今日皆さんに，専門家として是非知っておいて欲しいということでお話ししたいと思います。

話は簡単で，（力を込めて）世界でハンセン病の問題を，今，20万人くらい新しい患者さんが出ますから取り組んでいて。隔離政策を世界が止めたのはいつかというと，1950年代です。「予防法」という法律が世界で廃止されたのは1960年代です。そういう中で，日本だけが世界の潮流に逆らって，1996年まで隔離政策を続けた。これが，すべての日本のハンセン病問題の根源なんですね。だから，黒尾さんの言われたことは正しいんですけども，それ以上にひどいことを日本の近代ハンセン病対策，特に医療の問題。あるいは，ハンセン病が治った人を還して，普通の社会で普通の病気として治療するということをやらなかった。この罪がものすごく大きいんです。それをはっきり認識してほしいと思うんです。すみません。長くなりました。

**≪進行：森口健司≫**

どうもありがとうございました。あと１人くらいです。はい，お願いします。

**≪坂本千代≫**

坂本千代と申します。私は，木村真三くんと小学校・中学校と同級生で，中学校の時に，文部省指定の同和教育の取り組みをしていた中学校で，私が部落の出身です。（はっきりと力強く）

同和教育については結構学んでいたと思うんですけど，私は中学校の２年と３年の時に，課題図書にあった読書感想文の本で，ハンセン病のことが書いてあった本を読んで愛媛県の賞をもらったんですけど，その本が今思えばその隔離政策を推進する1953年の予防法を肯定する内容だったんです。

片や，同和教育を受けて，自分も地区の人間で，学習会とかをやっていても，ハンセン病の間違った記述には何も気がつかず，それを良しとした感想文を書いた。そして何か賞をもらったみたいな，そんなことがありました。

（精いっぱいの思いを込めて）それから，私のいとこが在日の人と結婚するという話があったんですが，その時に，おじさんたちがすごい反対をして。それに何も言えない自分がいました。「何でそんなに，認めてよ」と心で思っていたけど，言えませんでした。

１つのことがわかっているつもりでも，そこにつながっているものがわからなければ，学びが足りないってことだなあって，今日，真三くんの話を聞きながらつくづく思ったので，今日，中学生の皆さん，高校生の皆さんの話を聞きながら，私もこれからも学び続けたいなと思いました。ありがとうございました。（拍手）

**≪進行：森口健司≫**

中学生のみんな。今日みんなに会うために東京から来てくれたんです。そういう人たちがいるということです。そういうつながりがあるということです。お母さん方どうでしょうか。中学生はいいですか？（手の上がらないのを確認し）では，黒尾さん，時間があまりないのですが。

**≪黒尾和久≫**

わかりました。（笑顔で）和泉先生，フォローありがとうございました。

（一言一言ゆっくりとかみしめるように）今日，ここに来て，中学生の話を聞いて。実は昨日，羽田で，45年ぶりに中学の同級生４人と出会って，小学校，中学校の時のいろんな話をしました。それで学校が結構荒れていて，いじめとかたくさんあったんですね。それでいじめに加担して，嫌な思いをして，自

分の中でくよくよして,「よくあんなことをしたな」ということを腹の中で思っていたことがあって。同級生には，どちらかというといじめられる側にいたような人間もいて，その話をお酒を飲みながら振ってみました。

「実は俺，こんなことをずっと思っていたけど，あの時のこと，どうお前ら覚えている？」って言ったら，いじめられている子がどういう子で，どういうやつらがそれに対してどういう言いがかりをつけていたかというのを，みんな鮮明に覚えていました。

腹の中は，あんなことを認めてきた。それを見過ごしてしまった。あるいは，やめろよと言えない自分がいたことを，それぞれ濃淡はあるんですけど，みんな腹の中で思っているんですね。

だから,「今思えば，あの時，１人じゃなくて，２人，３人，同じようなことを思っている仲間がいたのなら，多少殴られたり蹴飛ばされたりしたかもしれないけれど,『やめろよ』と，そう言うことができたんじゃないかな」という話をして,「じゃあ,我々の息子たち，あるいは孫たちはどうなんだろうか」という話をして別れたんですね。

この話を１度したいと思っていて，今日だから,「こんな日が来るとは」という話がありましたが,やっぱり，誰かれ，そういう腹にためていたり，言えなかったりするっていうことは，何かしらあるんですね。嬉しいことだけではなくて，実はもっとあぁいうふうにすべきだったのに，自分はできなかった。同じようなことはないだろうかということを,目配りをしたり，身構えたりするっていうことが必要だし，やっぱり，そう思っているんだったら，それを確認するっていうことが大事なのかなということを，今日，子どもたちの話を聞いて,「あぁ，俺も中学の時に同じようなことを悩んでいたり，自分のことを卑怯者だと思っていたりしたことがあったな」と思い当たりました。

やっぱり，いじめられていたやつに今度会ってみたいと思うし，(いたずらっぽく)いじめっ子は元気に暮らしているんですよね。今度会った時に，少し言ってやろうかなと思います。同窓会のようなものがあればですけど。

(中学生・高校生への思いを込めて)みんなの話を聞いて，また，ボクも元気をもらいました。世代によってとるべき情報っていうのはあると思うんですけど，知識人というか，物知りを育てるだけじゃダメだと思うんですね。人間社会に生きていくためには。でも知識は積んで欲しい。でも，知ったことをどう生かしていくか。より深く知るためには何が必要なのか。情報の裏をどうとるのか。

そして，人にどう共感して,「共感する」っていうのは感情が出ますけれども，その裏を取るために撚巴(ねんぱ)し，確信して言動に表す。その繰り返しなんだなあと思います。ですから,(笑顔で)今日,色々なことを調べたという話がありました。知りたくなるんです。それでよかったんじゃないのかなと思います。また，何かあれば声をかけてもらえればと思います。

**≪進行:森口健司≫**

めっちゃよかったです。木村さん,お願いします。

**≪木村真三≫**

その,「非常に言いづらいことを言えるようになった」ということを言ったお友達,(壇上の中学生たちを見ながら，一言一言丁寧に)Ｎ村さん。ボクは，すごい勇気だと思う。

で，何もできないと言った。これはパレスチナで働いていた私の知人が,「何もできない時は一緒に泣けばいい」って言う。そういうのもあるんです。だから，自分ができることというのは何かと考える時には，悩むんじゃなくて，やはり,「そこで一緒に泣くことができればいいんじゃないかな」というのが私の回答です。

(穏やかな中にも,はっきりと)あと,アッチャン,勉強足りないよ。100%足りない。ごめん。

ボクはこの分野の専門家です。今日は，化学論争はしなかった。化学論争したって，これ，進まないんです。「原発事故も人権問題なんだよ」というのをボクは言いたい。ただ，化学論争だったらいくら

でも闘える。この原発の良いところは言えるけど，じゃあ，原発の悪い所はどこですとあなた言えますか。言えるその解決策はできますか。そういうことができないのに，その部分で寄り添うことができない。寄り添うんじゃなくて，「寄り添う」とか「わがことにする」というのは，自分の事象に，出来事に置き換える。

例えば，N村さんが言ったことで，「わがこと」に置き換えてくれたわけよ。ボクの話を。初めてそこで出てくるんです。だから，初めてこういったところで言ったことを責めるんじゃなくて，褒めなくちゃいけないんだけど，ボクは，ボクの大学でもどこでも教えている生徒さんや学生には，ボクは，「はっきり言うので，自分がきちんとできてないのに，言っちゃいけん。勉強というのは，とことんやらなければいけない。だから，本当にとことん突き詰めた議論をするというのが，一番重要なことなのかなというのが，専門家の私のコメントです。

（フロアーに向かって）で，中２の娘さんのお父さん，大変です。これは何も言わずにいていいです。ただ，お父さんの背中を見せてください。お父さんが何をやっているか。背中を見せるだけで，子どもさんは見ています。正しいことを突き進むことが，ボクは良いことだと思います。

実は，息子が３歳の時に，別れて福島に入りました。だから，今も会えません。で，どうやって頑張っているか。結局，親の背中しか見せられないんです。きれいごとじゃないです。だから，頑張ってください。以上です。（拍手）

**≪進行：森口健司≫**

ありがとうございました。本当にね，人権教育は喜びなんです。本心を語り合えるという喜びなんです。出会いとつながりなんです。その関係性なんです。学び続けていける，つながり続けていける。

月に１回，月に２回，顔を見る。声を聞く。また力が湧く。そういう精いっぱいの姿をやっぱり伝えていく。言葉って，やっぱり力をくれる。

本当に人生が変わっていく姿，力がどんどんついていく姿，生き生きと語る姿，つまりながら必死に語る姿に，やっぱり癒されていくんですね。司会にあたってくれたちーさんに，最後に語ってもらって閉めたいと思います。

**≪ちーさん≫**

ちょっと焦ってしまうところがあって，鳴門金時農家の，（進行の森口さんより「託也さん」と声がかかる）あぁ，託也さんですか。（真っ直ぐ会場に手を伸ばし，発言した島藤さんに対し）大変ですよね。ボクも大変迷惑をかけていました。親に。何でしょうかね。（手振りを加えながら）頑張ってくださいとしか言えないんですけど。

学校に行きづらくなっている方に言いたいことが，実は前からちょっとあって。「弁才天のお家」って活動をされている場所知っていますか？（照れくさそうに明るい笑顔で）今度，うちの記事が出るので，大変迷惑をかけられた親の体験談が載っているので。是非見てくれたら，親心としては安心できるのかもしれないんで，良かったら是非見てください。

（黒尾さんの方に向き変え，表情を改めて）私が，もっともっともっと言いたかったのは，ハンセン病の話を聞いたことで，ボク，もともと，何かの作品を読んで「わがこと」として捉えるっていうのが，すごく好きだったんです。だったというか，今も好きで。例えばマンガとか，（一つ一つに指折りしな

がら)小説とか，映画，ドラマとか。いろんな作品とか。また歴史とかから，たとえば自分に通じるものは何だろうとか，歴史であっても，戦争を始めたすごいやばいやつがいるとか，教科書に載っていたりしますけど，じゃあ，なぜこの人は戦争を始めたんだろうかとか考えるのがすごく好きです。例えばマンガでも，何でここで主人公は怒っちゃったんだろうみたいなことを考えるのがすごく好きなんですよ。

において，ハンセン病って，ボクの中では，すごく遠いもののイメージだったんですよ。もちろんその療養所にも行きたいし，学びとして受け入れたいっていう気持ちはすごくあったし，もちろん，吉成先生からも話を聞いたりしたので，多少の知識はありました。でも，それが絶対完璧であるとは言えないし，もし，例えば今ここでハンセン病がテーマの作品を読んで，たとえば「千と千尋」なんか，ボクにとってはもろそうで。ジブリ作品が結構好きで，たまに見て。「あぁ，これはこういうことなんだろうな」とか思って見たりするんですけど。それにおいても，やっぱりボクは，今日聞いて，「千と千尋」を，「あぁ，そうだったんか」と思ったんです。

(一言一言を大事に言葉を紡ぎ出しながら)知識として入ってはいた。入ってはいたけど，絶対ボクは理解できていなかったって，今日気づいたんです。ここで話を聞いて。もちろん，木村さんのＶＴＲ，仙太郎さんの居るＶＴＲを見せてもらったんですけど，それでも，なお，ボクは実体験としてというか，「わがこと」にはしているんだけれども，わが体験として刻まれていないから，一番近くに親身に寄ってあげることができていなかったと思うんです。

だからボクは，何でしょう。吉成先生は聞いたことがあると思うんですけど，仙太郎さん，木村さんの大伯父さんが居るっていう動画を観た時にも，ボクは正直なところ，「なぜ，ここまで追えるんだろうか。亡くなった人に対して」と思っていたんです。でも，話を聞けば聞くほど，「あれ，追えるかもしれない。ボクでも」って，思えてくるんですよ。やっぱり，何でしょう。「百聞は一見にしかず」。また，体験したいことが増えて，誰かから聞いて，また増えて，その人のそばに立ってあげたくなる。そんなのが，何でしょう。聞いて，見て，知って，自分をどんどん変えていく活動として，人権活動の在り方としてあることができるんじゃないかなと，今日話を聞いて思いました。

これで，ちょっと間が悪いですが，締めとしようと思います。(ゆっくりお辞儀をしながら)ありがとうございます。(拍手)

**≪進行:森口健司≫**

(笑顔で)本当にありがとうございました。あっという間の３時間です。こんな３時間はないです。

この中には，中学時代に全体学習を通して出会った人もいるんです。やっぱり，部落問題を語り合った関係性っていうのは，ずっと生きる糧になっていきます。

(じっくりと思いを込めた語りが始まる)実は，今日，私を中学校の教師にしてくれた，私の大恩人の告別式でした。もう16時ですから，告別式が終わっています。昨晩，お通夜には行ってきました。

私は，中学１年の入学式の日から，私の出身の吉野中学校の柔道部に入りました。柔道の強い学校で，かなり厳しい練習をしていましたので，小学校５年，６年で柔道をしていたんですが，親は，「中学校に入ったら，もう柔道はやめてよ」と言っていました。でも，入学式の日から練習に行っていました。その，柔道を教えてくれたのは，役場から指導に来ていた私の人生の師です。その方は，部落の方です。

当時，中学２年の時に，全国大会に徳島県で優勝して行くようになります。その時のメンバーは，全員部落の子です。部落の仲間です。私がその中学２年の時に，その部落の仲間，部落の先輩たち，同級生に，そして柔道を教えてくれた，そして部落問題を教えてくれる形になるんですけど，その人生の師である柔道部の監督の言葉が，私に学校の先生になろうという夢を与えてくれました。

全国大会で宮城県の仙台へ行きました。本当に夢のような大会です。青葉城に連れて行ってくれまし

た。日本三景の松島へ連れて行ってくれました。何でこんなことをしてくれるんだろうと思いました。

そして，帰りに東京で１泊します。東京見物をさせてくれる。泊ったのが「全国町村会館」。近くに国会議事堂があります。首相官邸があります。最高裁判所があります。そこを１時間以上かけて歩くんですね。監督と一緒に。初めて見る東京です。

「こういう世界を経験するんぞ。森口，お前は中学校の先生になって，柔道を教えて，今度は先生という立場で，子どもにこういう経験をさせてやるんぞ」（精いっぱいに力強く）そんな話をしてくれたんです。それは，ずっと，私の糧となってきました。その，柔道の師とのつながりが，教師という道，そして，部落問題を自分の問題，「わがこと」として語れる子どもたちをつくる営みへと，つながっていきます。

（しみじみと）教師になった時に，その監督さんのお嬢さんが中学３年でいました。今度は，教師としてそのお嬢さんを教えたんです。「水平社宣言」を語りました。部落問題を語りました。その場面というのは，やっぱり鮮やかに私の中に生きています。そして，そのお嬢さんが，小学校の先生になりました。教師になりました。ちょうど私が道徳の全国大会をした時，その後の，県の研究授業の公開授業をした時に，彼女は結婚を約束した，結婚差別により厳しい反対のあった男性と一緒にその授業を見に来ました。その２人の姿がビデオに映っています。公開授業の映像にその２人が並んでみている姿が残っているんです。

（力強く）その２人が結婚差別を乗り越えて結婚していく。その結婚式の招待状。招待状の文面を，私が文部省の道徳の読み物資料として書いた「峠」の冒頭の招待状に入れ込んだんですね。やっぱり，それが私の背中をずっと押し続けて行ったし，彼女や彼女のパートナー，もう彼は小学校の校長先生になっているんですけど，２人の背中を押してくれます。

そして，つい３週間前なんですけど，その２人の息子さんが27歳。私の故郷の小学校の先生になって，徳島県の人権教育の研究大会で報告をしたんです。「故郷の先人，部落の先人」について。それは，我々の部落解放運動の原点です。「竹重宮吉」という方の生きざまに触れるという報告をされたんですね。私は，その大会に行き，お孫さんにあたる彼に，「キミのおじいさんによって私は導かれ，教師になった。部落問題に取り組む原点がおじいさんにある。おじいさんとの出会いとつながりが私の人生を豊かなものにしてくれた。出会いとつながり，命が命を生む。出会いが出会いをつくる」そんな話をしました。

お孫さんはその日，入院中のおじいちゃんのところに行って，「今日，健司先生と会った。お母さんの恩師の先生と会ったんやという報告をしました」という連絡をもらいました。人権教育の研究大会で，お孫さんが語った言葉，その語りを受けて私が語った言葉は，音声しか取れなかったんですけど，その音声をいつかおじいちゃんにも聞いてほしいなと思っていましたが，そのことは叶わなかったです。

11月３日午前１時４分に亡くなられた。昨晩がお通夜。そして，今日は葬儀です。（あふれる思いを懸命に抑えながら）本当に，昨日別れをしてきたんですけど，やっぱり感謝しかありません。人権教育の出会い。本気で思いを伝えてくれた。背中を見せて，こう生きるんだぞと問うてくれた。そのことは，やっぱり感謝しかありません。部落問題を，人権問題を「わがこと」として語り合える関係性というのは，やっぱり喜びです。

（温かい笑顔で）今日，こういう場が本当に実現するんだろうかと，吉成先生から問題提起された時に，本当にできるんだろうかという気持ちもありまし

た。でも，皆さんの語りに，本当に癒されたんです。(精いっぱいの感謝を込めて)今日来た人は幸せです。本当に幸せです。こんな言葉に出会えるんです。

最後にまとめてくれたちーさんの言葉。どう聞きましたか。彼は高校１年ですよ。自分の高校時代を振り返ったら恥ずかしくなります。やっぱり，すごく良い子どもたちと出会えたことに感謝します。本当に。

３連休の３日目，大変お忙しい中，この場に集まっていただいたこと。そして，子どもたちに熱い熱いまなざしを送っていただいたこと。本当に感謝しかありません。(あふれる笑顔で)保護者の皆さん，人権学習の喜びを，子どもたちを通して，わが子を通して，噛みしめてください。子どもが幸せになっていく姿は親の喜びです。子どもは希望です。私たちの希望です。そんな思いをもって積み上げていきたいと思います。

(手元に置いていた本を取り上げ会場に示しながら楽しそうに)「ＰＭ(ペットボトルマジック)」という本を書いた，この人はどこまで頑張るんだろうかって。「ナツノオト」を書いた。本当にすごいなと思います。

この２つの本は，子どもたち全員が読んでいます。是非家族で読んでください。そして，家族で語り合ってください。そういう仲間とのつながりを大事にしながら，そういうネットワークを積み上げながら，学習を積み上げていきたいと思います。本当に，長時間お付き合いいただきまして，ありがとうございました。

(温かいまなざしで，壇上の全ての生徒たちを見まわしながら)最後，全員であいさつして終わりましょうか。はい，じゃあ，起立しましょうか。

ありがとうございました！(塾生も後に続き，元気な声で「ありがとうございました！」)

これで「第１回人権こども塾文化祭」を終了します。(拍手)